

「クィア・セオリー／リーディング／ライティング」を聞いて（第二回筑波大学比較・理論文学会主催シンポジウム）

著者	張 栄順
雑誌名	文学研究論集
号	14
ページ	108-109
発行年	1997-03-19
その他のタイトル	Queer Theory/Reading/Writing
URL	http://hdl.handle.net/2241/14051

筑波大学比較・理論文学会主催＜シンポジウム＞ 「クィア・セオリー／リーディング／ライティング」を聞いて

張 栄 順

竹村和子氏の発表「噂の俳優—グレッタ・ガルボをクィアに見る」では、映画のいろいろな場面を参照しながら、その部分部分を同性愛の観点から読み解いてゆくのが興味深かった。表面上のプロットは異性愛を描いていても、サブプロットでは、同性愛が示唆されていることをみごとに検証してゆく手ぎわに驚かされた。小谷真理氏のクローネンバーグの映画『クラッシュ』の分析も、テクノロジーとセクシュアリティの奇妙な相関関連を明らかにし、大いに衝撃的であった。

ところが、最初、映画の分析の巧みにひきこまれながらも、このような分析にどういう意味があるのか、私にはよく分からなかった。わざわざサブプロットに潜んでいる同性愛を読み取ろうとするのは、誰にとつての、何のための「クィア・セオリー／リーディング／ライティング」なのかという点に疑問をもったのである。

実際、私は、＜クィア＞という言葉を、このシンポジウムで初めて聞いた。ゲイとレズビアンという言葉さえも、あまり詳しくは知らなかったのだ。ただ、私が知っていたのは、映画や雑誌などを通して耳にした常識程度のことだけだった。そのなかでも今まで印象深く残っているのは、大学時代に観た映画『ウェディング・バンケット』のなかで、ゲイであった主人公の「母が、私を男しか愛することのできない息子に産んでくれたせいだ」というセリフとともにスクリーンに映されていた母の悩む姿である。また、最近雑誌で読んだことであるが、ゲイとレズビアンとは異なるものの、ペニスも膣もある両性具有者が言った「あたしみたいなのは、神様が作ったおもちゃなのよ」(『目を閉じて抱いて』)というセリフも、なかなか忘れることができない。このようなく彼／彼女>らの悩みと罪悪感が、＜クィア＞に対する私の考え方に影響を及ぼしたせいであろうか、ゲイとレズビアンといった場合、私は、＜彼／彼女>らを遺伝によって変態性愛者に生まれえざるをえなかった人々として哀れみ、正常に生まれた自分に安堵感を感じていたのである。

だから私は、このシンポジウムで、＜彼／彼女>らのために何か叫ばなければな

らないと漠然と考えていたかもしれない。ところが、三氏の発表と後半部のシンポジウムの討論を通して、やっと気がついたのは、現実的な問題や感情的な思い入れよりも、私たちの根本的な思考体系こそ直すべきではないかということだ。まず、正常であるということに対して。私は、彼らを異常だと思ったのだが、その考え方が間違っているのではないだろうかという疑問である。何が正常で何が異常なのか、一定の規範でくられる多数派が正常で、逸脱した少数派が異常なのか。

人間は＜男／女＞という概念や役割を担い、その文化に合わない存在を、＜クィア＞な存在として扱ってきたのだ。生物学上の違いを社会文化的性差として持つに至った、それぞれの性的アイデンティティーは、現在では、次第に＜男／女＞という二つのカテゴリーに収まることができなくなっている。だからこそ逆に、社会は、制度として＜男／女＞という二つのカテゴリーのなかに人々を囲い込もうとしてきたのだった。異性愛と同性愛についてもこの延長線上の問題だと思う。異性愛が正しいという強制的異性愛（compulsory hetero-sexuality）があったからこそ、同性愛者はおぞましい存在、排除されるべき存在として、自己の正当な権利を主張することのできない存在に陥るしかなかったのではないだろうか。この点で、竹村氏の「同性愛をまつわる＜噂＞は、＜アウト／クロゼット＞、＜体制／反体制＞、＜規範／逸脱＞、＜メインプロット／サブプロット＞、＜抵抗／占有＞、＜消費する／される＞、＜抵抗／占有＞、＜商品／個性＞、＜ファンタジー／事実＞の二項対立を攪乱させて、同性愛を搦手から可視のもの、そこに存在するものにしていく」という分析や、小谷氏の性的逸脱に関する指摘は、そのような既存の概念を突き崩すための積極的な読みであったと思う。また、もう一つ気付いたことは、同性愛の原因が遺伝的であるか、社会的な要因であるかという論争は、結論づけられないものであり、問題の解決策にはならないということだ。

ゲイとレズビアンを＜クィア＞な存在として排除したり、抑圧したりしてきた強制的異性愛の文化に対して、もう一度それを概念化し直すこと。これこそ、同性愛の問題を解決できる鍵であり、今度のシンポジウムの目的ではなかったかと思う。そのためには、私たちの認識の変化、すなわち＜彼／彼女＞らの文化を独自の社会的・文化的特徴を持つ文化の一つのイデオロギーとして認めていく努力が必要だと思う。